

大橋千代子校

松陰中納言物語

翻刻篇

古典文庫

大橋千代子校

松陰中納言物語

翻刻篇

古典文庫

古典文庫第二八九冊

昭和四十六年七月二十日印刷発行

非売品

校 者 大 橋 千 代 子

発行者 吉 田 幸 一

物語言納中陰松

篇 刻 翻

東京都杉並区和田一―四―二三

印刷者 共立印刷株式会社

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古 典 文 庫

電話(九一〇)二七一七

振替口座 東京 一四五九七番

凡 例

一、本書は尊經閣文庫本（古典文庫 第二八四・二八七冊「松陰中納言上・下」複製）を底本とし、できる限り原文に忠実に翻刻したものである。

一、活字翻刻にあたり、漢字、仮名はすべて原文の通りとしたが、異体文字は現行文字に改めた。

一、仮名遣は原文の通りであるが、解説の便を考えて、句読点、濁点、括弧等を加えた。

一、所引の和歌には、通し番号を付けた。

一、終りに、翻刻公刊を御許可下された前田育徳会に対して、謝意を表する次第である。

昭和四十六年四月

大橋千代子

松陰中納言物語

第一

山の井……………五

藤のえん……………一四

ぬれぎぬ……………一九

第二

あづまの月……………三三

あしの屋……………四三

車たがへ……………五五

第三

むもれ水……………六三

文あはせ……………七〇

おきの嶋……………六

九重……………七

ねの日……………一〇

第四

うるかぶり……………一〇

をと羽……………一四

南の海……………一三

やまぶき……………一六

第五

花のうてな……………一三

はつ瀬……………一四

宇治河……………一五

松陰中納言第一

山の井

春の空いとえんに霞わたれども、はれぬ心のながめには、明ばのゝあはれもむ
なしく御涙にくらされ、夏のなかばもすぎゆけば、あつき御思ひのいやまさり
つゝ、萩吹秋の初風に、そよとのよすがをもとめ出給へり。内侍の君の御めの
と侍従といひしかば、いもうとのむすめのいとけなきをめして、おまへなる菊
の花を給はせて、「これを侍従に見せよかし。世にまれなる色香なり」とて、
ちいさき文をつけ給へり。なに心もなくうけとりて、侍従のもとへゆき、「中
納言どのゝ見せたてまつれとて給はりぬ」とまいらすれば、「まことに色香の
つねならぬ事よ」とて、手にとりてみるに、御文あり、

松かげのしらべにかよふ琴のねの我笛だけにあふしもがな 一

とかきたまへり。さては姫君にみせたてまつれとおもひたまへるにより此山の井の君は、そのころ一の中納言にて、東宮のかみをかけ給へり。御笛をよくふかせ給へば、常に御まへにめされて、藤の内侍に琴をひかせて、御あそびのありけるに、見そめ給ひしより、たえぬ御物思ひにしづみ給へるときこえしが、うへのもれきかせ給はん事もつゝましく、中納言の御心も思ひやられてすまひけるが、折ふし姫君まうのぼり給はむとて、みすをかゝげさせたまひて、「いみじの花の色や、いかなる宿のかきねにや」と、ゝはせ給ひければ、

手折つる人は誰ともしら菊の枝にぞふかき色はみえける 二

といひてたてまつれば、その人々こそあるらめと思ひあはさせたまへども、いさゝかうけひき給へるけしきもなく、すのほかになげさせたまへば、せんかたなく、「此よしけいし給へ」とてかへしぬ。

中納言は、よるのおましにも入たまはで、「あやなの月のけしきや。物おもふ袖のなみだには、やどらずともありなん」と、ひとりごちしてゐ給へるに、かへり入て「侍従がかくけいせよ、ときこえさぶらふ」とて、

あかねども君が手ふれし花の枝はかへすをふかき色香ともみよ 三

「よしやそれ、侍従にたいめんさせよ。まがきの菊もさかりなれば、それをかごとに」とのたまへれば、「心をかけさせ給へるにや、もはやいそぢにも過なん。心はまことにさがなくて、かははさるのやうになんある物を」と、あやしがるけしき見給ふて、いやとよ、心をかくるにはあらず、菊の色香をよくわきまへぬるときゝつれば、みせばやとおもふばかりにぞ。あけば、朝露のひぬうちこそよからめ、車をつかはしてん」とて、あけはてぬに、おきな君をのせて、御文をこうちぎにそへて、つかはし給ふ。

から衣きてもみよかし朝露のまだひぬ程の花の色香を 四

侍従は「それと心えぬれど、きのふ一枝みしさへあるに、ましてまがきをとくにこそながめんづれ」とて、あひのりて出ぬ。

露は朝日にきら／＼とにはひわたりにて、色々さける花のうへに、玉をこぼしかけたらんやうにいとおかしく見ゆれ。見やりの山には紅葉々の色ことなるに、霜のしろくをきけるは、何にてか染つらむと思ひやられる。中納言殿出たまひて、「月に見るこそなをおかしくは有なれ」とてめしあげさせ給ふ。きのふの一枝の事をほのめかしたまふて、「玉だれのひまもとめ給ひしよりの御物思ひに、ゆふべもまちつくべき心地もなければ、せめては玉の緒の消やらぬうちに露しらせ給ひて、くらきやみぢの月とおもひはるけなん」と、かきくどき給へば、いとあはれとおもひたてまつりて、「松かげの中納言の、わりなく思ひたまふなれども、つれなくてのみ過し給ふ御心なれば、御返事まではかたくあらんかし。御文をみせたてまつりてこそ、その色もみえめ。いか成えびす心

も、ちづかになればさのみはかなき物にこそさぶらへ。いまはかへりなん」といへば、はや月こそ見ゆるなれ。庭のやり水よりまがきのもとまでつゞきて、いと白たえになりゆくを見すつる事のあらんかしとて、すだれをまかせて見いださせたまふ。

山路より影をさそひていとゞしく月に色そふしらぎくのはな 五

御かはらけ給はり、御ぞなどかづけさせ給ひて、いとふけ過るほどにかへりぬ。松かげのおもひかけたまへるをしらで、きのふの哥をねたくもよみけるよ、思ひあはせ給はゞおかしくこそおぼすらめとおもひつゞけ給ふて、いとゞねられ給はず。つとめておさな君をつかはして、

ありし夜のことの葉ぐさを頼みにて露のいのちもまたきえぬかな 六
とあるを見て、さまざまはかりけれども、御手にさへふれ給はず、

「言の葉に契り置てし玉の緒のながくはいかであひ見ざるべき 七

と申せ」とてかへしぬ。

つれなくのみ過させ給ひて、年もかへりぬ。ねの日の松につけて、

玉の緒のながきために引かへてつれなき松の色をこそみれ　ハ

御ふみを見せたてまつれば、「いかゞおぼしけるにや、あはずは何を」との給へれば、いとうれしくて、御すゞりをまいらす。御文のはしにいとちいさう、「はつねのけふの玉はうき」とかき給へり。をしかへして御文あり。

手にとりてみるだにうれし玉づさのむすぶちぎりのはじめとをもへ

ば　九

とありけれども、ましてつれなかりければ、おもひよりはり給ふて、きさらぎ中の五日の日、侍従のもとへ、

「きさらぎやむかしのけふのけふりとて我ももえなんだへぬおもひに　二〇
かぎりにこそ侍れ。我ゆへに御つみのふかくわたらせ給はんこそ心にかゝれ」

と、鳥のあしがたのやうに、いとはかなくかき給へるを御らんじさすれば、時しもあれ、けふはいとど後の世のむくひをおぼしなげきて、

きさらぎやけふのけぶりの末だにもなびかん物をわしの山風 二

侍従御ふみ給はりて、いそぎまいり、御ありさまを見たてまつれば、いとかよはくなり給ふて、のたまふ御ことの葉もましまさず、御なみだにしづませ給へり。御ふみをまいらせければ、いとうれしげに、御まくらををしのけて、うちながめ給へり。「ちかき程にうへのこきでんの花を御らんじたまふべければ、其おりこそ御さうじのほとりも、人ずくなにこそさぶらはめ。」いとしのびてとくかへりぬ。

中宮の御庭の花、例の年よりも色香のまさりければ、うへに御覧じ給はんとて、ひるつかたよりわたらせ給ひて、色々の御あそびありけり。中納言もめされけれども、みだり心ちとて参り給はず。暮つかたに女車にあひのらせ給ひ、

おさな君にあないせさせ給ひて、御さうじのつま戸ぐちにたゝせたまへば、侍従出てくらき所にいたてまつる。おまへには少納言、弁の君などさぶらひて、「今宵はまうのぼりましますで、のどかにこそあれ。御あそびには何かな」などいひのゝしる。侍従「いつも夜をふかすこそわびしけれ、とくやすみ給へ。君も御心ちあらげにみえさせ給へ」といふも男君はきゝ給ふらん。人をしづめて、侍従御袖をひきて、「おさな君はそこにこそる給はんづれ。われもやがてかへりこん」とて、いたてまつる。君のかたはらにそひふし給ひて、年月のうかりし事どもをかたらひ給はんとし給ひけるに、少納言はしり入て、「あけさせ給へ、うへよりめされさぶらふなり。侍従の君は」とのゝしるに、おどろきてもしけちければ、「弁の君、ともしもちて」といひて、おどろくしく入くる。おとこ君は、やうくさきの所へすへりかくれたまふ。「おまへに琴をきかせ給はんに、とくまいらせ給へと、御つかひのたびくなり」

と声々にいひののしれば、まいりたまひぬ。侍従ばかりのこりゐて、「まことに、浅き御ちぎりのほるなくこそわたらせたまへ。さりとも、やがてかへり給はん。其程は物の音こそきゆれ」といひなぐさむる。源中納言の笛の手をきゝしり給ふて、いとねたくおぼす。御まへの御あそびもほのく／＼とあけゆく程なれば、ありしよりけにおもひまさりて、かへり給ふ。つとめて御文あり、

思ひやれ夢のうきはしと絶してなく／＼かへる道しばの露 三
御かへし、

「道しばの露うちはらふ袖よりも心にかゝるゆめのうきはし 三
中さへ絶ずは」とあるを、たのみ給ひて過ぎせたまふ。

藤のえん

やよひの比、松陰の家の藤を御覧におほんみゆき有べしと、かねておほせごとありければ、御もふけし給へり。此源中納言は、五条わたり賀茂川のほとりに家づくりして住たまへり。池をいとおほきにほらせて、河をせき入させ、汀のかたに松をおほくうへならべて、其かげをおもしろくつくりなしたまひければ、世の人松かげの中納言といひあへり。その松に藤のしなひの、世にためしなうながう咲かゝり、色ことなるが有けり。また夜をこめてのみゆきにてはありけれども、五条あたりにては、ひんがしの山の端よりさし出る日影の、玉の御輿にひかりをそへ、音楽のをとは、賀茂の川風にさそはれて、おもはぬかたまで聞ゆなるも、いといかめし。もふけのためにつくり給ふ御殿はいとたかけ